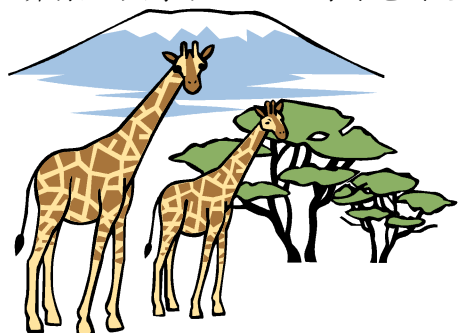


青写真のない人生をどう生きるか…親友青島(仮名)の場合

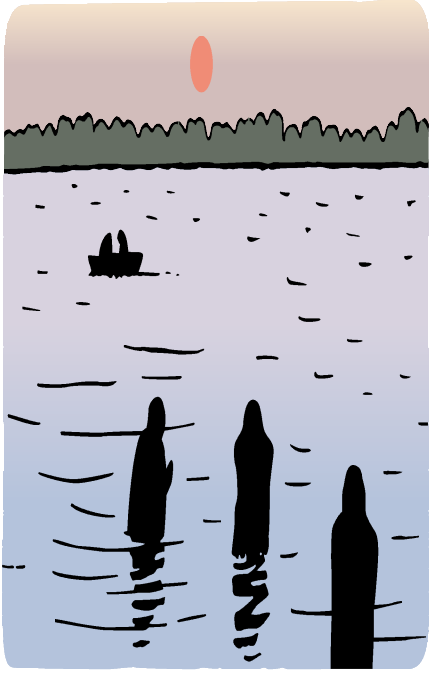


□私の高校時代からの親友に青島恵一(仮名)という男がいる。実に変わった自由奔放な生き方をしている、会う度に羨ましく思ったり、時に冷や冷やさせられたりもする。彼は大学4年のある日、突然プロのカメラマンになろうと決心して、今もひたすらその夢を追っている。いや、一步一步その夢に近づきつつあると表現した方が的を射ているかも知れない。時々『ウータン』などの雑誌に「ラップランドのトナカイと人間の生活」などという特集が組まれると、彼の写真と雑文が載ったり、外車のカレンダーに彼の写真が使われたりもするが、まだ彼の長年の夢である『写真集』は世に出ていない。従って、まだまだ彼の前途は険しいと言わねばならない。

□青島と初めて出会ったのは高校時代だ。彼は当時部員が7人しかいない、貧相な野球部で、甲子園を目指してひたすら練習に励んでいた。彼の頭の中は朝から晩まで野球のことで一杯だった。私と会えば「地区予選を明日にひかえているが、部員が足りないので出てくれないか」などという話題ばかりで、正直なところウンザリさせられていた。高3の全ての大会が終わり、誰もが進路を考え始めた頃、親と対立して家を追い出され、六日町で独り下宿生活を送っていた私のところにしょっちゅう泊まりに来ては、人生について夜が明けるまで熱く語り合った。彼は野球の夢が捨てきれず、早稲田大学に入り、東京六大学リーグで野球をやろうと夢見ていた。



□青島は高校卒業後、二浪して念願の早稲田大学に入学したが、もう野球のできない体になっていた。彼は野球を諦めると同時に世界旅行研究会に入って、勉強もせずに、アルバイトで金を貯めては、インドやアフリカなどを飛び回った。ある時など、私の東京のアパート(の大家)にインドから国際電話をかけてよこし、「ジン(=私の渾名)、元気か?今、ゴアの海岸の夕日を眺めている。綺麗だゾ!お前にも見せてやりたい。



ところで、俺（おれ）、しばらく前から黄疸（おうだん）にかかりやばいんだ。医者に行きたいので少し金を貸してくれ…」などという具合に、ドキドキさせられることがしばしばあった。この世界旅行研究会での、特に第三世界（＝アジアやアフリカなどの貧しい国々をさす）の自然や人々の生活をつぶさに見聞してきたことが、彼の人生観を大きく変え、彼をプロのカメラマンになろうと決意させた。人の二倍も大学に在籍した挙げ句、卒業する頃になり、「ジン、俺はサラリーマンで生きるのは嫌だから、プロのカメラマンになることに決めた」と突然言い出した。その数日後、今も一線で活躍しているプロカメラマン白川氏の自宅に押しかけ、無理矢理弟子にしてくれるよう頼み込み、無給で働きながらカメラ技術が無から学んだ。彼は心が繊細で思いこんだら一途、しかも気持ちごとにつもなく大きい。私はそんな青島に半ば呆れながらも、心底惚（ほ）れているのだ。

□それからというもの、青島は東京でタクシー・ドライバーを昼夜となく半年間必死でやって、まとまったお金が貯まると、後の半年はたった独りでカメラを担いで、スカンジナビア半島の北極に近いラップランドに出かけて行っては、ひたすらトナカイやオーロラを撮る生活。そんな生活をもう何年となく、飽きもせず続けている。この正月休み久しぶりに青島に会った。野球で鍛えた彼の筋肉質の体も長年の過酷な生活の中で衰えを見せている。頭も白髪が交じり、薄くなっていた。「青島、無理すんな…」と心の中で呟（つぶや）く。声に出して言いたいのだが、言葉にならない。最後は「じゃあな。早く『写真集』を出せよ。その時は、俺も 100 部くらいは教え子に売ってやるからナ」のいつもの決まり文句。この言葉を何度口にしたことか。

□私の新潟の自宅には、ラップランドの夕日に向かって海鳥が飛んでいる写真が額に収まって掛かっている。青島が私の誕生日にプレゼントしてくれたものだ。酷寒のラップランドの厳冬の中、たった独りでテントを張り、一週間粘ってこの一枚を撮ったのだという。私はこの話を聞いて、無性に切なくて、有り難くて、大声を出して泣いてしまった。彼のプロカメラマンになる夢、素晴らしい『写真集』を出版する夢は、いつか実現されるのか？単なる夢で終わるのか？私には分からない。でも、そんな夢を追いつつ求めながら生きている男も世の中にいるのだ。私はそんな青島を友人にもっていることを終生の誇りに思っている。

□青島の生き方は、決して人に勧められる生き方でないし、誰でもがたやすくできるものではない。むしろ誰もが安定志向を願う現代社会の中では、希有（けう）な生き方と言っていいだろう。私は一つの夢を追いかけて、実現しようとする悲壮な、ひたむきな生き方とその努力に学びたいと思っている。青島の生き方を見ていて、張りのある人生には、夢と勇気と努力が不可欠だと思う。日々後悔（こうかい）と懺悔（ざんげ）の山を背負って生きている私には、「我が人生に悔いなし」と映る青島の生き方は眩（まぶ）しい。でも、少年老いやすく、あの青春の夢を追っていた頃から遙か遠くまで来てしまい、気がつけばお互い還暦を迎えた。今度青島に会ったら、自身の来し方をどう総括しているのか、人生に悔いはないのか、聞いてみたいと思っている、何だか怖い気もするが…。

